

## 第5章 ぐい呑みの共箱

### 1. 共箱

ぐい呑み収集の楽しみ方の一つに共箱の鑑賞がある。共箱とは箱書が作家自身によるものをいう。共箱には中に入っているぐい呑みを輸送時、保管時に保護する役目がある。このような機能的な側面だけでなく、箱そのものも鑑賞の対象に十分なりうるものである。

デパートの工芸品コーナー、ギャラリーなど大概のところでは、ぐい呑みのみが陳列してある。そしてぐい呑みの前に作家名と価格を記したカードが添えられている。ガラスのショウケースのガラスの棚2段に所狭しとぐい呑みが並べられている。横3列、ぐい呑みの前の白い味気ないカードとぐい呑みが囚われの身のナンバープレートをぶら下げているように並べられている。ショウケースを覗くと、「ここから、出して、お願い」と叫んでいるようである。まだギャラリーの方が色布の上に、それなりの間隔で並べてあるので、ぐい呑みもゆったりしている。話は脱線したが、このように、共箱と一緒に展示してあることはまず無い。共箱とのご対面は注文してからという場合が多い。気に入ったぐい呑みを注文すると、別のところに保管してある共箱を取り出して見せてくれる。時として、注文後、そのまま別室で丁寧に包装され、家に帰るまでどのような共箱なのか期待と不安の時間を必要とすることがある。これはこれで楽しみの一つではあるが。

街の陶芸店では特別コーナーを設け、そこそこの作家のぐい呑みを共箱とともに展示してあることがある。共箱も同時に見れ、実に楽しいのであるが、共箱が日焼けしている。紫外線で紐が退色し、共箱も日焼けの背中のように紐の跡がくっきりということがある。

以前、富士溶岩焼きの窯元を訪ねたとき、店の目立つショウケースにぐい呑みと共箱、おまけに共布まで展示してあったことがある。地震対策ということで釣糸で捕らわれたガリバーよろしく結わいつけてあった。銘は「紫陽花」。ぐい呑みに一目惚れ。是非譲って欲しいとお願いし譲り受けたことがあった。日焼けの共箱、色褪せた共布。しかい、譲り受けた状況が状況だけに、時の経過がなせる技は「味がある」ものである。

展示会に作品を間に合わせたものの共箱の製作が間に合わず「箱アト」と書いてある場合もある。ぐい呑みを買って求めたその時点では共箱にお目にかかれない。アトから送ってはもらえるが、共箱とともに感激に浸りたい気持ちがはぐらかされる。後から送られてきた時に感激を新たにということではガマン、ガマン。

ぐい呑みと同じく、共箱も千差万別。個性派ぞろいである。

### 2. 共箱の箱書

箱書は、蓋の表に墨で例えば、「(1行目) 萩焼 (2行目) 盃 (3行目) 十一代休雪、そして陶印」「(1行目) 赤志野ぐい呑 (2行目) 正太郎、そして陶印」のような形式が代表的である。

なかには、森 陶岳のように蓋の表に「ぐいのみ」と書き、裏に「(1行目) さむかぜ (2行目) 陶岳、そして陶印」のような例や、杉本貞光のように箱の底部に「(1行目) 井戸 盃 (2行目) 寺垣外 貞光」のように記した例もある。

箱書で中身が「ぐい呑み」であることを表す書き方もいろいろある。小生のこれまでのコレクションで圧倒的に多いのが「ぐい呑」である。次いで「酒呑」「ぐいのみ」である。「酒盃」「酒杯」「盃」もある。

珍しいところでは、小山富士夫の「酒觴」、河本五郎の「くいのみ」、金城次郎の「グイ呑」といった例もある。

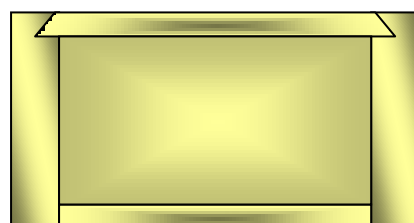
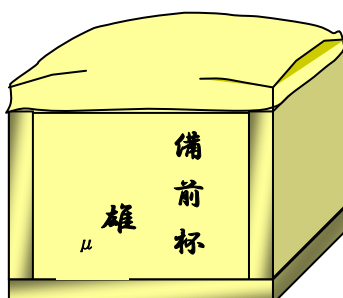
箱書の文字もそれぞれに個性があって楽しいものである。達筆もあれば、お世辞にもうまいと言えないものもある。行書、草書、独創性に富んだ書き方と様々である。小生の眼識では判読不能のもの時としてある。

デパートで購入時、箱書が読めない場合、どのように読むか聞くことにしている。係りの人も読めずくずし字典などとにらめっこ。デパートでは後で調べて連絡をしてくれることがある。

### 3. 共箱の造り

共箱の材質は、桐が圧倒的に多い。杉のものもある。また、窯業地ごとにほぼ同じような共箱になっているのは興味深いところである。

共箱の蓋の造りも、表が全体に丸みを帯びた上品な造りにしてあるものや、そうでなく平板状のものもある。裏が下駄の歯のように平行した二本のガイドをこしらえて簡単なめ込み式にしたものや、きっちりと本体の内径にあわせ、ガイドを四角形の造りにしたもの、本体側に切り込みガイドを入れ、スライド式にしものもある。



中身のぐい呑みと共箱の格は比例しているようである。

箱書の作家の名前の後に印鑑を押してあるのが大半である。朱印が圧倒的に多い。しかし萩焼のように、判で押したように黒印のものもある。

作家の年代によって陶印を変える陶芸作家もいる。陶歴とともにいつ頃作られたものか推測する手掛かりになるので注目する価値がある。

共箱に入っている共布も楽しみの一つである。たいていが、箱書に使用されたのと同じ印がおしてある。布の材質も様々である。色合いも作家によって違っている。

箱に紐があるもの、無いものがある。紐も横一文字、十字掛けがある。紐も織り方、色合いが様々である。

箱の中に陶歴が入っている。作家自身の生い立ちから、展覧会の入賞実績、これまでの個展の開催の来歴が書かれている。これまた、千差万別。紙質も様々。和紙で作っているのが落ち着きがある。また上品さと優雅さを醸しだしている。陶芸作家自身の写真を載せているものもある。代々の系図を掲載してあるものもある。

当地のやきものの歴史、特徴、使用上の注意なども記されている。

なかには、今が一番、過ぎ去りし過去、入選歴など無用、従って陶歴を作らないという陶芸作家もいるようだ。

## 4. 様々な共箱

ここで、代表的な作家の共箱を眺めてみる。

数字の単位はcm。

### (1) 藤原 啓

蓋表 : 板状  
蓋裏 : 下駄の歯の様に平行した二本のガイドをこしらえてはめ込み式にしてある。  
紐 : なし  
箱書 : 蓋裏に「備前 酒杯 啓 ㊥ (朱)」  
箱のサイズ : 8 × 8 × 7. 1 (高さ)  
ぐい呑み : 6. 2 (口径) × 4. 2 (高さ)  
共布 : 26 × 26、(中央部に陶印あり)

### (2) 藤原 啓

蓋表 : 丸みを帯びた造り  
蓋裏 : 本体の内径にあわせ、ガイドを四角形の造りにしてある。  
紐 : 山吹色、横一文字  
箱書 : 側面に「備前 金杯 啓 ㊦ (朱)」  
箱のサイズ : 9 × 9 × 9. 3 (高さ)  
ぐい呑み : 7. 2 (口径) × 5. 5 (高さ)  
共布 : 2 5 × 2 1、(ほぼ中央部に陶印)

(3) 三輪休雪 (十代)

蓋表 : 板状  
蓋裏 : 下駄の歯の様に平行した二本のガイドをこしらえてはめ込み式にしてある。  
紐 : なし  
箱書 : 蓋表に「萩酒盃 十代 休雪造 ㊦ (黒)」  
箱のサイズ : 8 × 8 × 6. 5 (高さ)  
ぐい呑み : 6. 7 (口径) × 5. 0 (高さ)  
共布 : 2 2 × 2 1、(下部右端「萩やき 休雪の朱印」)

(4) 三輪休雪 (十一代)

蓋表 : 板状  
蓋裏 : 下駄の歯の様に平行した二本のガイドをこしらえてはめ込み式にしてある。  
紐 : 褐色、中央に縦黒の串刺し模様、横一文字  
箱書 : 蓋表に「萩焼 盃 十一代休雪 ㊦ (黒)」  
箱のサイズ : 9. 3 × 9. 3 × 8. 0 (高さ)  
ぐい呑み : 7. 9 (口径) × 5. 9 (高さ)  
共布 : 2 3 × 2 3 (下部右端「休雪の黒印」箱の㊦と異なる)

(5) 小山富士夫

蓋表 : 板状  
蓋裏 : 下駄の歯の様に平行した二本のガイドをこしらえてはめ込み式にしてある。

紐 : 濃褐色中央に縦淡褐色の三条、十文字  
箱書 : 蓋表に「酒觴 古山子」  
箱のサイズ : 10.3 × 10.3 × 7.0 (高さ)  
ぐい呑み : 6.7 (口径) × 5.0 (高さ)  
共布 : 22 × 21 (淡い黄色)

(5) 坂田泥華

蓋 : 本体側に切り込みガイドを入れスライド式にしてある。  
紐 : なし  
箱書 : 蓋裏に「萩ぐい呑 坂田泥華造 ㊥ (朱)」  
箱のサイズ : 9.7 × 9.7 × 6.5 (高さ)  
ぐい呑み : 6.7 (口径) × 5.0 (高さ)  
共布 : 22 × 23 (淡い青色 中央部に大きく「泥華」の染め抜き)

(6) 加藤卓男

蓋表 : 板状  
蓋裏 : 下駄の歯の様に平行した二本のガイドをこしらえてはめ込み式にしてある。  
紐 : 黒、中央縦褐色の連続縞模様、横一文字  
箱書 : 蓋表に「巖志野酒杯 卓 ㊥ (朱)」  
箱のサイズ : 7.5 × 7.5 × 7.0 (高さ)  
ぐい呑み : 5.8 (口径) × 4.7 (高さ)  
共布 : 18 × 20 (黄色、袋縫い 下部右隅 ㊥ [朱])

(7) 清水卯一

蓋表 : 板状  
蓋裏 : 下駄の歯の様に平行した二本のガイドをこしらえてはめ込み式にしてある。  
紐 : なし  
箱書 : 蓋表に「梅華皮 盃 卯一 ㊥ (朱)」  
箱のサイズ : 7.7 × 7.7 × 7.5 (高さ) 杉材  
ぐい呑み : 5.8 (口径) × 4.7 (高さ)  
共布 : 19.5 × 22 (黄色、下部右隅 ㊥ [朱])

(8) 河本五郎

蓋表 : 板状  
蓋裏 : 下駄の歯の様に平行した二本のガイドをこしらえてはめ込み式にしてある。  
紐 : 淡い褐色中央縦黑白交互連続模様  
箱書 : 蓋表に「灰釉 ぐい呑」蓋裏「五郎造?判別困難」  
箱のサイズ : 8.6 × 8.6 × 6.5 (高さ)  
ぐい呑み : 6.5 (口径) × 4.4 (高さ)  
共布 : 16.5 × 22 (黄色、下部右隅 50㊥ [朱])

(9) 林 正太郎

蓋表 : 板状  
蓋裏 : 本体の内径にあわせ、ガイドを四角形の造りにしてある。  
紐 : 緑と白の交互連続模様、中央縦一条褐色、十文字  
箱書 : 蓋表に「赤志野割高台 ぐい呑 正太郎 ㊥ (朱)」  
箱のサイズ : 10 × 10 × 9.8 (高さ)  
ぐい呑み : 7.4 (口径) × 6.5 (高さ)  
共布 : 24.5 × 25 (淡い翠、下部右隅 ㊥ [朱])

(10) 杉本貞光

蓋表 : 板状  
蓋裏 : 本体の内径にあわせ、ガイドを四角形の造りにしてある。  
紐 : コゲ茶、十文字、太い  
箱書 : 箱底に「粉引 盃 寺垣外 貞光」  
箱のサイズ : 10 × 10 × 9.8 (高さ)  
ぐい呑み : 7.4 (口径) × 6.5 (高さ)  
共布 : 28 × 30 (紐と同色 )

ぐい呑みと共箱が醸し出す香り。ぐい呑みの品格を維持するにふさわしい共箱。また共

布とのマッチングも楽しいものである。

紐は組みひもが主流。共布には縁が始末してあるもの、始末せず切りっぱなしのもの、色も様々。

ぐい呑み本体はもちろん、共箱・共布、陶歴のセット管理も収集する側に課せられた使命である。こういったものは、散逸させずに、きちんと管理すべきである。

めったに無いことであるが、箱に虫食いが現れることがある。注意すべきである。

桐の箱など、十分に乾燥させてから作られているので、ひずみが生じることはまず無いが、時折、若干反りがあったりすることがある。保管にも神経を使わなければならない。

換気にも気をつけ、永くお付き合いできるようにすべきである。